

1939年度大接近期に於ける

火星協同観測結果報告 (V)

遊星面課長 伊達英太郎

第 4 區

シレニウム海

(120°~180°)

この地區一帯は火星表面で最も淋しい部分である事は、先回の報告にも記したが、今回は、只シレニウム海が Disk 中央やゝ上を通過すると云ふだけでシレニウムのより細い詳細を見詰め様と努力したが、前述した理由で充分の結果を得られなかつた。南半球が地球へ向くので、南極地方の海の詳細を見るべく努めたのだが、一帯に淡黒い擴がりがかやつち出来たのみである。

シレニウム海は東半部が濃く、西半部がやゝ淡い事は、確實に見られたが、それ以上詳細な點を見られぬ事は頗る遺憾である。

運河——北半球に位置する運河は、シレニウム海から、第5區のトリビウム沼へ走つてゐるタルタルスと、その東方のギガスとの2つが新に濃く、この2運河を境となす部分が一帯に淡黒く、コントラスト効果の一例を示してゐる。この2運河は、この地區の運河として最もよく目を引いたもので、20厘以上の口径の観測者及10厘反對の樋上氏にも認められてゐる。

第 5 區

シンメリウム海、エリシウム、トリヴィウム沼等

(180°~250°)

次の第6區に次いで、望遠鏡所有者に喜ばれる地區で、先づ第一に Disk 上に目につくのは、上半部を東西に横はるシンメリウム、チレニウム兩大海であらう。流石にこのシンメリウム海はその全姿を Disk 中央上部にハッキリと横たへ、北側沙漠部に面した側には、ラストリゴニウム灣、シクロプス灣の2灣が目立ち、今回は新にラストリゴニウム灣に東接する位置にあるシンプレガダス島が非常に良く見られた。

この島は、天界 217 號の火星圖には晝かれてないが、非常に顯著な存在であつたが、1937年度には誰にも見られなかつたに係はらず、今回は筆者にのみではあるが容易くかやつち出来たものである。尙、この島は、アントニヤチ氏の圖では3つに分れてゐるが、小生の26厘には、シーイングも理想的ではなかつたが、1つにしか見えなかつた。(第3圖参照)

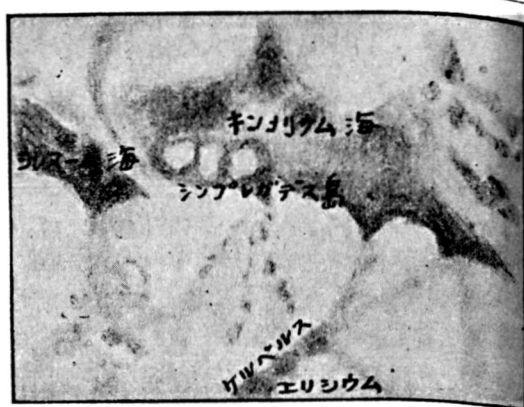
シレニウム、シンメリウムの南方エレクトレス、エリダニヤ等の圓形大陸は

明瞭に見られ、シモイス、スカマンデル等の運河も認められ、この邊一帯は、37年度に見られぬ詳細を認め得た。

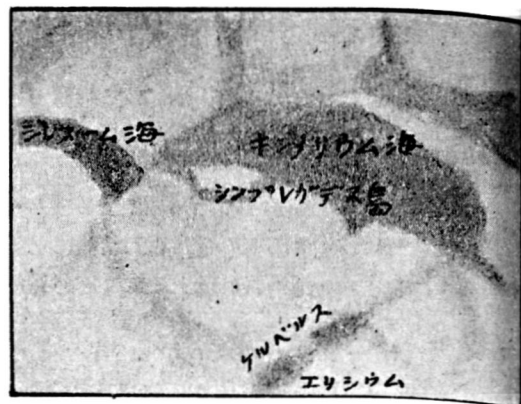
赤道から北方へ行つて有名なエリシウムは、矢張り判然とした形は認められず他の地方と大體同色をして新に白色が強いと云ふ事もなかつたのは、1937年度と大差無かつた。

シンメリウムからトリヴィウム沼へ續いてゐるセルベルス運河——運河中最も濃く太いもの——は、今回も非常に顯著で、26極附屬の36耗ファインダに40×を使用して、確實に管見し得た程、濃い存在だつた。従つて8極鏡以上の使用者には全部認められてゐる。

トリヴィウム沼からハデス運河を経てプロボンチス I, II は、37年度非常に顯著だつたが、今回は Disk の下端近くであつた爲めプロボンチス I の方のみ Disk の下端に見られた。



第 3 圖 甲 アントニヤチ氏
1911年



第 3 圖 乙 伊達英太郎
1939年

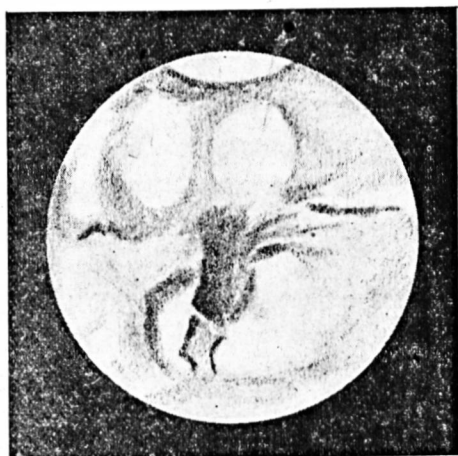
第 6 區

チレリウム海、大シルチス附近
(250°~310°)

常に云ふ如く、火星面上最も吾々の目を楽しませてくれる地區である。大シルチスは常と變らずその雄大な姿を Disk の中央に見せ、其上部にはヘラス大陸が圓形の姿を現はしてゐる。

大シルチスは、今回は、Disk の中央を通過するので、其正しい形態をキャッチする事が出来、各観測者の見取圖の中、シルチスの部分許りを4枚撰出して天界第221號と223號の口書に發表しておいたが、植上敏一氏の見取圖中に大

分趣の異つたシルチスの畫があるので第4圖としてここに掲出する。シルチスの北端から曲つたニロシルチスとナサモンが非常に濃く、その間が淡黒く、一見太い1本の運河の如く見られる。この10厘鏡にこれ位見られる程附近の運河は濃く見られ、シルチスの東方トス・ネベンテスの大カーヴは26厘には、観測の最初から最後まで明瞭に観測出来る位濃い存在であつた。尚シルチスの色彩は大體として濃緑灰色であつた。



第4圖 樋上敏一氏 8月3日

シルチスの南部、ヘラス大陸は、他の大陸や沙漠に比し白色が強く、黄白色を呈し、このヘラスの中央部に位置するデ1湖は、今回の接近には是非共と期

待してゐた筆者に、7月29日夜の良シイイングの許に初めて其姿を見せてくれた。又、樋上氏も6月27日と8月1日の見取圖に微に書いておられる。

次に、ヘラス大陸の西側を走る、ヤオニス海峡は37年39年度共に濃いが、特に今回は非常に強く目を牽いた存在であつて、シルチス南部から發して、ヘラスの西側を蛇々と續き、南極海(オーストラレ海)に連つてゐるのは壯觀であつた。

前後したが、シルチスの東方、前述のシンメリウム大海の西端部とヘスベリヤの點に一言したい。この部分は、1937年度にはシンメリウム海の西端部は尖つており、ヘスベリヤ中のヒリヤ湖がよく見られ、天界317號の火星圖通りの常態を示してゐたが、今回は、シンメリウム海先端部が奇妙に膨れ(第3圖参照)ヒリヤ湖をどうしても確認する事は不可能であつた點から見て、或はシンメリウム海とヒリヤ湖が合一したか、又は尠く共シンメリウム海とヒリヤ湖の間の部分が特に濃くなつて合一された如く見えただけではなからうか?

チレリウム海は、アントニヤチ氏の火星圖には(第3圖参照)澤山の斑點の集合から成つてゐるが、今回は20厘以上の口經の望遠鏡でも斑點に分離出来なかつた。因にこのチレリウム海は37年度に、渡邊恒夫氏が、花山のク30厘屈折を使用して數ヶの斑點に分離された海である。

シンメリウム海と大シルチスの間にあるリブヤ部は、今回もハツキリ認められ、37年と大差無い形狀を示してゐた。このリブヤ部を横切るトリトン運河が

7月29日確實にキャッチ出来た。シルチスを狭んで、このリブヤの反対側デルトトン灣は、今回は37年度程明瞭に分離出来なかつたが、相當著しい形狀を呈してゐた。

シルチスから出てゐるトスネベンテス大彎曲運河に接續してゐるカシウス運河は、37年度は斑點の連鎖に見られたが、今回は、Disk の下端に近い爲か、斑點狀には見えなかつた。

シルチスの北端にあるアスチュサベス、ニロシルチス(前述)、ナサモンは、ナサモンが見難かつたが、他の2本は確認する事が出来た。

第 7 區

兩 極 地 方

南極冠——協同観測を開始した5月初旬は、南極冠は非常に低緯度(約 -50°)迄擴がつてゐたが、逐次其範圍を縮めつゝ溶解を續け、6月初旬には -40° 位となり、6月1日火星の秋分を過ぎてから目立つて其溶解が盛んになつて來、對衝の頃(7月23日)には -70° 邊迄溶解し、8月に入ると其溶解速度は急激となり、中旬には、圓形が見える様になり、24、25兩日には、極冠の縁に切れ込みが見えたり等しつゝ、消失に近付き、9月10日頃には、僅かに白色の部分を残すのみとなつて、火星の冬至に近付き、18日には殆んど確認出来ぬ位に縮小した。

北極冠——観測開始當初は全然見られなかつたし、又、北半球は見難かつたが7月に入つて Disk の傾きが少くなり、北半球が大分見える様になつてからは北極冠の結成に注意してゐたが、それ迄、北極附近一帯を蔽つてゐた黄白雲が消失すると果然、7月8日の筆者の観測に北極冠らしきものを認め、以後僅かつつではあるが日増しに範圍の擴がるのを見る事が出来、8月中旬頃には、小口径機にも見られる位大きくなつて來、冬至に近付くにつれ益々大きくなり、9月初旬には $+50^{\circ}$ 邊迄擴がつて來たのを認め得たが、其後の観測が無いので不明である。

この北極冠の結成に當つては、急報にも記した如く、結成に先立つて、極地一帯に黄雲が蔽ひ、これが消散すると其下に雪冠が結成されると云ふ説を裏書きし得た事は、今期観測に當つての收獲の1つであつた。

今回の衝における特異現象

以上の観測概況によつて大體今回の衝に於ける表面模様のアウトラインを述べたと思ふが、今一度これを振り返つて、特に注意し度い現象をピックアップすると下の如くなる。

1) 火星の高度が不足だつた爲、全般に涉つてシーイング悪く、従つて比較的シーイングの良かつた1937年度に比して観測成績が低下したのは遺憾な事實である。

- 2) 雲の出現が非常に少く、白雲の出現の頻繁だつた1937年度に比すと頗る物足らなさを感じる。
- 3) バンドーラ海峡の消失（或は極端な淡化）。
- 4) アリンの爪形の分離。
- 5) マーガリチフェル湾の淡化。
- 6) アルジレ I の不明瞭。
- 7) 北極地方からアンダリウム海、ルナエ湖附近の、黄雲に依る隠蔽。
- 8) ベチス運河とイユベント泉の消失。
- 9) ガンデス、イステル兩運河の地域の濃化。
- 10) ソリス湖の分離とタウマジャ地方の確認。
- 11) シムブレガデス島の出現。
- 12) エリジウム地方の不明瞭。
- 13) シンメリウム海の西端トリトニス湾とヒリヤ湖の合一？
- 14) トス・ネベンテス大彎曲運河及ニロシルチス運河は非常に明瞭。
- 15) デルトトン湾は少々不明瞭。
- 16) ヘラス大陸中のデール湖確認
- 17) ヤオニス海峡は非常に濃く明瞭。
- 18) 北極冠の結成に際し、黄雲との関係は明白に確認。

観測を終つて考ふべき事項

期待した程に良結果を得られなかつた事は、上記した如く、火星の高度不足による事が主たる原因であるが、1937年度に活躍された前田静雄、渡邊恒男兩氏の出征による缺測があつた事は、蔽ふべくもない重大原因である事は否めない。

何事に依らず、全ての仕事、特に學術は競争がなくしては良い結果の出ない事は事實であつて、此の意味から云つても、前田、渡邊兩氏の不参加は、木邊部長、筆者は勿論、全課員に與へた影響は大なるものがあると思ふ。幸ひ兩氏共、無事大任を果して歸還され、目下は職業の第一線に活躍されてゐるから、1941年度は再び、兩氏のより以上のカムバック振りが見られる事と期待してゐる。

39年度の衝を終へて、本會遊星面課としては、3回（1935、1937、1939年）の對衝を送迎した事になる。来るべき1941年度の衝を迎へ送れば4回の對衝をキャッチする事になるので、この4回の観測の結果を纏めて、相當詳細な観測リポートを作成し度く思つてゐる。この天界への各對衝の観測の報告は、従つて、只單に、観測参加者のリストと観測のアウトライン、表面の大體のフィチュアの紹介に止めてゐるのである事を改めて註しておく。より以上の詳細は、數年後

発表豫定の、O. A. A. 火星課リポード第1號を期待され度い。

本會の火星観測法を、も早や古い観測法であると斷じておられる會員もあると聞く。筆者も勿論、これが良い方法とも新しい観測法とも考へてゐない。只 B. A. A. の観測法の1部を踏襲したまゝである、勿論これ以上嶄新な観測方法へ進む考へも有つてゐるが、會員中で、適當な方法があれば、筆者宛御一報下されば、部長とはかつて、適當と認むれば喜んで其方法を採用し度い。

以上で、1937年度の火星観測概略報告を終らうと思ふ。 一終一

訂正——見取圖數“天界”發表後、京都市の樋上敏一氏から、6月1日～6月27日迄の10枚の見取圖を受領した。故に、樋上氏の見取圖數は37枚となり、總合計は342枚となつた故、御訂正願ひ度い。

附 記： 去る七月10日、米國ロイエル天文臺のスライフ、E. C. Slipher 氏の火星観測報告記事が到着した。すぐ之れは急報 435 號に報じたが、此の報告によると、スライフ氏は 1939 年度の火星を観測するために、はるばる南アフリカのブルームフォンタイン市にあるラモンド・ホシ天文臺（ミシガン大學天文臺の出張所）に出張し、約8000枚の火星寫眞を撮影した由、そして此の夥しい寫眞と、更に、數十年前からロイエル天文臺で撮影された幾萬枚の寫眞との比較研究をした結果、こゝにスライフ氏の獲た 1939 年度の結果を發表したものであつて、米國の學者がよくやる如く、學會の開かれるのを待たずに、其の自信ある結論を、パッと日刊新聞に發表したものである。上記の伊達氏の報告と、このスライフ氏の報告とを讀み比べて見ると、いろいろ興味深い點が指摘されると思ふから、本誌の次號に此のスライフ氏の主意を詳細に紹介するつもりである。編輯の都合で、この八月號には間に合はなかつた。（山本）

本會に報導部を新設

近年學術の急激な進歩と、其れに應じて本會が會員及び社會全般に天文學上の新知識を適確迅速に報導し、研究と實地觀測とに便せしめるため、今回“報導部”を新設することゝなつた。之れと共に、急報は報導部に於いて編輯することとなる。さしあたり、報導部長は、山本一清博士、報導部員は高城武夫、木邊成麿、岡林滋樹の三氏よりなる。（急報 434）